

## アメリカ禅詩人、フィリップ・ウェーレン

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重松, 宗育 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008665">https://doi.org/10.14945/00008665</a>

## アメリカ禅詩人、フィリップ・ウェーレン

重松宗育

アメリカの詩人であり、また禅僧でもあるフィリップ・ウェーレンについては、これまで日本で紹介される機会があまりなかったので、まずその略歴の紹介から始めることにする。

- 1923年 10月20日、オレゴン州のポートランドに生れる。
- 1939年 母死す。その後、様々な仕事を体験。
- 1943年 アメリカ陸軍空軍部で、ラジオの部署で働く。1946年まで。
- 1946年 オレゴン州リード大学へ入学。ここでゲーリー・スナイダーやルー・ウェルと出会う。
- 1951年 『三つの風刺劇』（詩作）を提出して学士号を受く。
- 1955年 アレン・ギンズバーグ、ジャック・ケルアックと知り合い、10月、シックス・ギャラリーでの詩の朗読会に参加。以後、ほとんどをサンフランシスコ近辺に住み、詩作を続ける。
- 1966年 来日、京都YMCAで英語を教える。
- 1967年 帰国。
- 1969年 二度目の来日、再び京都に住む。
- 1971年 2年3カ月の日本滞在ののち、帰国。
- 1973年 得度（出家して僧侶となる）。
- 1975年 9月、タッサハラ（禅心寺）でシュソ（首座）を務める。以後、サンフランシスコ・ゼン・センターが活動の中心となる。  
この年より、ナローパ・インスティテュートの講師も務める。

1981年 ニューメキシコ州サンタフェの小庵に住む。

1988年 サンフランシスコに戻り、小庵を開き、エイズ患者のためホスピス活動に尽力、現在に至る。

主な詩集には、『僕の言うとおりに』(1960)、『毎日』(1965)、『熊の頭上で』(1969)、『退職金』(1970)、『古都の生活風景』(1970)、『他人の親切』(1976)、『減圧』(1977)、『語りつくして』(1980)、『あえぎながら』(1983)、この他に、小説が二編と、インタビュー集、『パンと詩について』(1977)、『壁からはなれて』(1978)がある。

ウェーレンがはじめて仏教に興味を抱いたのは、1941年頃、高等学校を終えた直後のことであった。哲学書や文学書を読みあさるうちに、A・P・シネットの仏教書とリン・ユタンの『中国とインドの智慧』にめぐりあった。これらの書物がきっかけで、ウェーレンは、以後、ずっと仏教に関心をもつことになった。ただ、禅について知識をもったのは、リード大学時代、友人のゲーリー・スナイダーが、鈴木大拙の著作を大学図書館から借り出して来た時からだ。ウェーレンは、ル・ペレックとの対談の中でこう言っている。

禅は、いろんな余計なものを切り捨て、人間を自由にし、創造のエネルギーで満たし、感情的なしがらみから解放させてくれるように見える。自分を縛りあげていたものが、消え去ってしまうか、少なくとも何らかの形で、自分がそれに対処出来るようになる。それに、「即今、ただいま」の問題がある。正にこの瞬間、何をし、どう切り抜けているか。また、それを活きたもの、しっかりしたものにしているかどうか、が問題なのです。（『壁からはなれて』）

こうした禅のもつ一面が、ウェーレンをひきつけたのだ。

それから、1955年、スナイダーと一緒に、千崎如幻の弟子だったアムバート

・サイジョウに出会い、正しい坐禅の仕方、作法を覚えてもらう。この縁によって、ウェーレンは、知識だけでなく、実践をも含んだより本格的な禅への関心を持つに至った。

1966年、ウェーレンは、スナイダーに誘われて、はじめて来日する機会をもつ。京都では、英語を教えながら禅の生活を垣間見て、1967年、一旦帰国する。1969年に「京都にホームシック」になって二度目の来日となる。再び京都に住み、毎朝、北山に向かって三十分の坐禅をするという生活を続けた。

そんなある日、京都の百万遍の知恩寺で境内を散歩していて、気がつくとも墓地の中にいた。そして、あたりの墓石を眺めているうちに、何故か涙が流れて止まることを知らなかった、という。筆者とのインタビュー（1987年6月26日、アメリカ・コロラド州ボルダーにて）で語ったところによると、「人間の移ろいやすさ、つまり無常感が心の深奥にふれたため」のようだ。そして、ウェーレンは、この時の体験を話すべき師を見つける必要を強く感じた。しかし、言葉の不自由さのために、その機会をもてないまま、1971年、アメリカへ戻る。

1972年、サンフランシスコ・ゼン・センターの指導者となったリチャード・ベーカーに誘われて、そのゼン・センターの一室に住み込むことになる。そして、「日本でやり残した勉強の大きさに気がつき、痛恨の思いにかられた」という。翌年、ウェーレンは得度し、出家する。さらに、その年、サンフランシスコ・ゼン・センターに所属するタッサハラ禅心寺（アメリカで最初の専門道場）で接心に加わり、はじめての本格的な禅の修行を体験する。1973年には、ベーカー老師の侍者を務め、1975年、タッサハラ禅心寺で首座（しゅそ・修行僧の長）の役を果たし、修行を深めた。そして、1983年まで、サンフランシスコ・ゼン・センターを中心に活動したが、その後、リチャード・ベーカー老師に伴って、ニューメキシコ州のサンタフェに新たな禅センターを開き、修行の日々を送る。その後、1988年、再びサンフランシスコに戻り、市内にエイズ患者のためのホスピスをつくり、そこで衆生済度の日々を送っている。以上が、ウェーレンの禅との関わりのあらましである。

さて、禅に関して、ウェーレンに最も大きな影響を与えた人物といえ、何

と言ってもスナイダーだ。リード大学時代からの親友であり、新しい人間のあり方や社会について語り合ってきたので、二人の間には、共通の感覚や理想がある。ケルアックの作品『ダルマ行脚』(THE DHARMA BUMS, 1958)には、次のような一節がある。

コフリンが「啓示は私的な体験だ」などと言うたびに、僕は、ジェフィの強烈な仏教的、理想主義的感覚を感じた。これは、ジェフィと、このお人好しのコフリンとが、大学時代から親友として、分ち合っていたものだ。ちょうど僕が東部時代にアルヴァと共通の体験を分ち合ったように。(中井義幸訳『ジェフィ・ライダー物語』講談社文庫、26頁)

このコフリン(ウェーレン)とジェフィ(スナイダー)との関係は、事実そのものだ。

ただ、スナイダーが、強い意思的な生き方をしているのに対して、「お人好しのコフリン」のウェーレンは、対照的に、雲の行くまま、水の流れるままに生きており、後には、文字通りの「雲水」としての人生を選択することになったのだ。1966年から1971年にかけての日本滞在中も、その流儀で決まった。一時帰国中のスナイダーから日本行きを誘われて、すかさず応じてのことであった。

日本滞在中、禅については、とりたててこれという収穫はなかった。その第一の原因は、スナイダーと違って、ウェーレンが日本語をものに出来なかった。ことに尽きるだろう。

小田雪窓老師の提唱を聞いたり、臨済禅の本格的修行の様子を見る機会をもったにも拘らず、せっかくの機会も活かせず、師との出会いにも至らなかった。ただ一つ幸運だったことは、友人であり、のちに師と仰ぐことになるリチャード・ベーカーが、当時京都にいて、交友を深め得たことだろう。

京都時代の作品『退職金』(SEVERANCE PAY, 1970)に、「肉を前にしての祈り」と「10月の食べ物」という詩がある。

お前たち、食べ物、動植物よ  
私は、こうしてお前たちを食べる。それは、お前たちを  
賢くし、美してして、喜びで満たすこと。  
生きとし生けるもの、そして  
すべての餓鬼、悲しそうな神仏のための悟り。

(1967年5月)

湯わかしの中に沈んだ松の葉  
菊の香りのスープと  
殻の中で煮えているサザエ  
この私に、永遠の生命を祈って

(1967年10月)

作者の観照は、食物連鎖へ向けられている。人間は、この食物連鎖の中であって、他の動物、植物の生命を奪うことで自らの生命を保っている。それは、人間だけでなく、生きとし生けるものの宿命だ。すべての生物は、他の生物の生命を奪うことによって生きている。また逆に見れば、すべての生物は、正に他の存在を活かすために、その生命を捧げる。この食物連鎖のありようを、全体から見ると、生物全体が一つの生命体とも言える。そこには、一個の生命と同時に、生物全体の生命がある。一個の生命は、生物全体の生命によって生かされ、全体の生命は、個々の生命によって成立っているのだ。

こうした「一即多、多即一」「個即全体、全体即個」の認識、さらに万物の相依相関のありようの認識は、仏教の、そして禅の根本的洞察である。いかなる存在も、切り離された個としてあるのではなく、個は個であると同時に、全体との関わりの中においてのみ個となりうる「個」なのだ。人間を、特別な存在としてでなく、この相依相関の網の中にある一存在とする視点は、正統的な西欧の伝統の中にはなかった。神と人と自然とを一如と見るのは、明らかに異端だからである。

このような仏教の人間観に、ウェーレンは、来日前から共鳴していたに違いない。おそらく日本の禅寺で、「五観の偈」を読む機会をもち、生命の連鎖への思いを新たにしたものが、ここにあげた詩であろう。

「五観の偈」は、禅寺で食前に読むお経で、五観の第一は、「功の多少を量り、かの来処を測る」である。「かの来処を測る」とは、その食物が、どこから、どのようにして、この食卓の上に運ばれて来たのか、どんな人々の、どんな労苦を経てきたのか、その事実を推し量ることだ。いかなる食物も、それぞれに、自然界の無限の恵みを受け、多くの人々の関わりを通して、この食卓に至ったというのが、まぎれもない事実である。そして、人間が、植物や動物を食べて生命を維持せざるを得ない以上、人間は、他の生命を奪うことによって生き長らえているのだ。「悲しそうな神仏」というのは、この殺生をせずにはおれない人間の業に対して、悲しみを抱く神仏のことだろう。

ただ、視点を変えれば、生きとし生けるものが、互いに生命を奪ったり捧げたりすることで、生命体全体が生き続けることになるなら、それはただ悲しむだけのことではない。むしろ、その存在を「賢くし、美しくして、喜びで満たすこと」なのだ。こうしたエコロジーの思想を、雲水たちの生活から再認識できたのはウェーレンにとって、日本滞在の収穫と言えよう。

さて、ウェーレンの作品中、最も禅に関わりのあるのは、『言いつくされて』(ENOUGH SAID, 1980)である。この詩集は、1974年から1979年にかけて書かれた63編の詩を集めたもので、ジョアン・カイガーへの献呈の辞が添えられている。その序文は、こんな言葉で始まる。

この本について一番面白いことは、これが正に理想的な環境のなかで書かれたことだ。いま著者は、サンフランシスコの発心寺とビッグ・サー東方の山奥、タッサハラ温泉にある禅心寺の道場の僧侶として、優雅な隠遁生活を送っている。こんな理想的な環境におかれたら、人生は、ただ喜びの連続と言うほかはない。

この時期のウェーレンは、すべてを禅の修行生活にかけている。

三つの道場から成り立っているサンフランシスコ・ゼン・センターの一つ、タッサハラ（Tassajara）の禅心寺は、アメリカで最初に建てられた専門道場で、サンフランシスコから南へ車で数時間走り、山岳地帯に入ると、山また山、最後には曲りくねった絶壁の山道を、やっとのことで通り抜けた所にある。急斜面の山々に囲まれ、いかにも人里を離れた感じの別天地だ。このタッサハラ（Tassajara）の禅心寺で、かつてウェーレンが修行していた時期に作った詩を集めたものが『言いつくされて』である。以下、その中からいくつか紹介しよう。

まず、「幽霊たち」である。

それも、50年も前に死んだ人々の、いや、人間だけじゃない——  
劇場や、電車や、大きいホテルが、私を追って  
こんなほこりっぽい小さな谷間までやって来る  
このカリフォルニアが気に入る奴なんて誰もいない  
どうして自分の故郷のポートランドへ戻らないんだろう  
もう飽き飽きだ  
今朝、夢の中に現れた新しい幽霊  
美しく、若く、まだ生きてる人だ  
この幽霊は、どこまでついて来るのだろう  
私は、何も追いかけない  
もうこれからは

専門道場で修行に励むためには、それまでの、あらゆる俗縁を断たねばならない。いわゆる「出家」である。家族も、過去も、自我も、捨てて、捨てて、捨てつくして、本来の自己に目覚めるのが禅の道だ。この詩は、ウェーレンのそうした覚悟の表明であろう。

さて、このタッサハラ（Tassajara）の道場での修行生活を垣間見せてくれる「洗濯場」という短い作品がある。



洗濯板を壁に掛けるたびに  
冷たい水の細い細い糸が  
私の手首を伝わって、脇の下へ流れる  
それも衣を濡らすことなく

作者が、道場の片隅にある洗濯場で、洗濯を終え、使った洗濯板を棚に掛けようとして、肩より高く持ち上げると、板に残った冷たい水が、流れ落ちて、手首から脇の下まで入り込む。ただし、水は皮膚に沿って流れるので、衣が濡れることはない、という意味だ。この詩からは、不器用な手つきで洗濯をしているウェーレンの微笑ましい姿が目に見えたと同時に、「冷たい水の細い細い糸」という言葉から、道場での厳しい修行の様子が伝わってくる。この厳しさに裏打ちされたユーモアこそ、ウェーレンの独自の持味に他ならない。

次の「差別」(しゃべつ)も、タッサハラの道場での生活を描いたものだ。

未明、強すぎるほどの月光  
庭は、終幕に近い舞台さながら  
荒々しく、この世ならぬ雰囲気  
H・P・ラブクラフトなら、お気に入りの形容詞を使うだろう  
「摩訶不思議！」と

母がよく「鳥のくちばし」と呼んでいた「流れ星」の花が  
ホッグバック墓地のまわりに咲いている  
一枚岩で出来た鈴木老師の記念碑  
野生のシクラメン、ちょうど『ギリシャ詞華集』に出てくるやつだ  
私は、禅堂に戻って、金色の糸で絡子(らくす)を縫い合わせる

朝の三時半頃だろうか、禅堂の庭を眺めた時の作者の感慨を描いたものだ。禅堂の朝は早い。夏は三時半になると飛び起きて、一日の生活が始まる。その

時刻では、外はまだ暗く、月の明りが頼りだ。そんな早朝、と言うより、夜半もふけた頃と言うべきだろうが、作者は禅堂の前庭に出てみた。こうこうと照る月の光は、あたりに幻想的な雰囲気をかもし出す。月光が、まるで舞台の照明のようだ。そして、庭にあるものが、みんな舞台に登場し、それぞれ自分自身の役を演じているのだ。「流れ星花」も、「記念碑」も、「シクラメン」も、みんな、それぞれに本来の面目を見せてくれている。舞台も大詰め、最後の見せ場だ。みんな、荒々しいほどの熱演である。庭一面に、あれもこれも、みんな踊り出して、とてもこの世のものとは思われない騒がしさだ。

月の光は、すべてのものに、平等に降り注ぐ。それに対して、個々のものはそれぞれの本来の個性に従って躍動している。それを差別(しゃべつ)という。全く無差別平等な月光の中で、それぞれの個性そのままに躍動するものたち。平等中の差別だ。めいめいが、好き勝手に踊り狂っている中へさす月光。差別中の平等である。「平等即差別、差別即平等」である。

次の「歡喜の化身」も、また禅の形而上学として面白い作品だ。

スープが入って、褐色に染まり  
スープの形を示しているキャンディーグラス  
それが思い出させてくれるのは  
我々に知り得るものは、全体ではなく、一部分だということ  
そして、その一部分が全体に「他ならない」ということ  
こうした「美」つまり芸術的衝撃が示唆するのは  
ただこのことだけ  
そのガラスの容器が、輝いている  
褐色と無色  
見事、まさに完璧だ

たまたま正規の皿が足りなかったのだろうか、キャンディーグラスにスープを入れた。透明のグラスが、スープの入った分だけ、色がついて見える。スープ

も、ガラスの形に従って、その形になっている。離れて見ると、ガラス全体は見え、スープ色に染まり、スープの形となった部分だけが見える。そこに見えるのは、部分であって全体ではない。見えない無色の部分と合わせたものが、全体なのだ。また、無色の部分は見えないのだから、見える部分は、そのまま全体でもある。つまり、スープの方から見れば、スープの入っている部分がそのまま全体だとも言えよう。そして、褐色の部分と無色の部分とが一体となって、「個即全体」「全体即個」のハーモニーの生み出す完璧な美が、そこにある。

以上、ウェーレンの代表的な禅の詩をいくつか見てきた。ウェーレンの詩には、禅を、直接、あるいは間接的に取り上げたものが少なくない。それは、彼が、出家の道を選び、20年近く禅僧としての生活を続けている以上、当然のことだ。禅と詩と生活とが一体となり、体験的深まりが見られる。

バートン・ワトソンは、良寛の和歌と漢詩の英訳書『良寛——日本の禅僧詩人』（1977）で、ゼンシンリュフウにあてて献呈の辞を書いた。ゼンシンリュフウ（禅心龍風）とは、ウェーレンの僧名であり、ワトソンが、自著を献呈すべき相手にウェーレンを選んだのは、ぴたりの選択と言える。ウェーレンは、いわば「アメリカの良寛」とも呼ぶべき人物である。彼の師リチャード・ベーカーが、良寛の属した曹洞宗の流れをくむ鈴木俊隆老師に嗣法したからと言うだけでない。ケルアックが『ダルマ行脚』で描いたように、ウェーレン人柄そのものが、「大愚良寛」を彷彿とさせるからである。